

イデオロギー国家としての中国

古典中国に始まる長大な歴史を概観するいくつかの文献を読んでいる。中国の歴史は王朝の盛衰史である。盛衰史を貫くものは強力な「観念」である。中国は極端な「イデオロギー国家」なのであろう。

中国で儒教が国教化されたのは漢代である。以来、皇帝という絶対的権力者が宇宙の主宰者である。「天」の命を受け、有徳の「天子」として「天下」に君臨してきた。天子の威徳が及ぶ中心域が「中華」(中原)である。威徳が周辺に諸民族にまで及んでいけば、この夷狄もまた天下の一部を構成する。

中華と周辺諸民族の關係が「華夷秩序」である。価値の序列において最上位にあるのが中華であり、この中華から同心円状に広がり、中華から遠くに位置する民族ほど価値において低いと観念されていた。中国史においては、対等な關係とか勢力均衡という欧米の近代においては前提とされてきた国際關係の観念は存在しない。存在したのは歴然たる不平等である。米C S I S (戦略国際問題研究所) のルトワック氏は言う。

渡辺利夫 (公益財団法人オイスカ会長)

一九三九年、山梨県生まれ。七〇年、慶應義塾大学大学院経済学研究所博士課程修了。経済学博士。筑波大学・東京工業大学教授、拓殖大学学長、総長、学事顧問などを歴任(二〇一〇年十二月、退任)。二〇一七年六月より現職。

「従属する朝貢国に中華帝国が与える最大の利益は、倫理・道徳的な面と同時に、政治面で中国の勢力範囲、つまり『天下』という同心円圏の中に入れてもらうことであつた。『天下』とは皇帝自身を中心として外に拡がる『天の下にある全てのもの』であり、朝貢してきた国を最低の野蛮な世界に生きてゐる外界の蛮夷たちよりも上位の世界に引き上げてくれるものなのだ。その代わりに朝貢国は恭しく服従することで、皇帝の倫理・道徳面での優位と同時に、政治面での優位も認めるのだ」(エドワード・ルトワック著、奥山真司監訳『自滅する中国』芙蓉書房出版)

中国の長い王朝史は大清帝国が潰えて以来、共和制の中華民国、社会主義の中華人民共和国と移り変わり、百年余の時間が経つ。しかし、国際關係を対等な国家、民族間の關係としてみる観念は中国には育っていない。国内異民族との差別は色濃い。南・東シナ海での軍事行動をみていると、東南アジア諸国を対等の存在とみなしているとも思われない。